

焼芋屋の少女

冷たい雨が一日中降り続いて、晩秋の暗い日曜日は静かに暮れようとしていた。私は雨に打たれながら暮色漂い始めた三鷹の街外れの通りを一人で歩いていた。冷たく湿った私の心を温めてくれるものさがしながら、しかし半ば諦めながら、雨に光るアスフルト道路を歩いていった。

私は、左手の屋並みの一角に目を留めた。バラック作りの鍍金屋の軒先に、三尺程の庇が突き出て、そこに雨が当つて零がたれている。その零に体半分濡らしながら、サビついた焼芋器が狭苦しそうに納まつて、生木をいぶしているような煙を、煙突から静かに吐いている。その傍らに一人の少女がうずくまつて、小石で何か地面に書いている。古びたセーラー服に、すり切れたデニムのズボンをはき、背中には内から洩れた電気の光が鈍くさしていた。そのすべての背景から浮き出るように少女の長いふさふさした髪がひとりわ立派にみえた。

私は百匁十三円の焼芋を買って十五円払うと黙つてそこを離れた。少女が売つてくれたのである。ほのかな芋の温もりが、雨に打たれて湿つた心を、かすかに温めてくれた。ふと、人の気配を感じて振り向くと、少女がそこに立っていた。

「これ、おつりです」と言つて、一枚のアルミ貨を差し出した。走つてきたのか、小さく息をはずませながら、雨に打たれる目をしばしばさせて、少女は私の顔を見上げた。小学校三、四年生位だろうか。その白い美しい顔の後ろにかなり暮色が濃くなつていた。賢そうなその顔立ちは、生きる重さをすでに感じとつてしまつたのか、あどけなさにきびしさがにじんでいる。白い大きめの歯をみせて表情だけで微笑むと、少女はまた走つていつて軒先にうずくまり、こちらを見て僕が角を曲がるまで手を振つていた。

(一九五六・一〇)